

外来語をどうして言い換えるのですか

甲斐睦朗

独立行政法人国立国語研究所所長

第1回

外来語の現状と
その解決のために

外国の報道機関の取材を受けました

国立国語研究所が、「外来語」委員会を設けて、分かりにくい外来語の言い換えに取り組みはじめたところ、私はアメリカやイギリスの報道機関からの取材を何回か受けました。質問の中心はいずれも「日本は国際化・情報化の時代を迎えているのに、どうして外来語の言い換えという時代に逆行する取組みを始めたのか」ということでした。よく聞いてみますと、せっかくな日本語に定着しようとしている英語圏の言葉を国家の力で排斥しようとしているのではないかと誤った疑念を抱いているようでした。私は、そのたびに国立国語研究所が外来語の言い換えに取り組む意図や姿勢を理解していただくようにしたのです。

姿勢が拒否的ではありませんか

日本社会のいくつもの分野では国際化・情報化の度合いが高まっていて、すでに国という枠を大きく超えた活発な動きがみられます。例えば会社などは統合などの機会を得て次々に国際社会に通用する社名に変更しています。

英語力を昇進の条件にする企業の話もよく聞きます。学校教育では実用的な英語の習得が求められています。このような国際化のうねりの中で、英語圏からの新来の言葉を分かりやすく言い換えようとするわけですから、何となく拒否的に映って見えるのでしょうか。

外来語は元の言葉と違ってきます

私は、外国の記者に、実はカタカナで表記される段階ですでに日本語化していて原語と食い違いが生じていることを説明しました。また、定着している外来語は除いていること、意味の分かりにくい大切な言葉だけを選んでいくことなどについて話しました。日本の英語関係者は和製英語を問題にしますが、英語圏からそのまま入ってきた言葉であっても、発音、形、意味、用法のすべての上でずれが生じているのです。私はある記者には省略の例として「リストラ」を挙げて説明したのですが、後で送られてきた記事の中の「RISUTORA」という綴りを見て、しばらく意味がつかめませんでした。

外来語は次の問題を引き起こします

- ① 日本人の英語習得の障害になっています。外来語でない正当な発音、意味、綴り、用法などの学習をしなければなりません。
- ② 外国人の日本語学習の障害になっています。英語圏の学習者にとって、例えば和製英語の「デイ・サービス」の意味が分かってしまうか。また、漢字圏の国々の学習者は文字に理解の手がかりがないということに困惑をしています。
- ③ 国民に分かりにくい外来語が増加しています。新しい考え方を表す外来の専門用語は使う側には新鮮な響きもあって魅力的なものでしょうが、多くの日本人には初耳の言葉であることに気づいてほしいものです。

分かりやすい日本語を目指します

外国の報道機関の方には、このような問題を具体的にお話して分かっていたらいいなと思いました。さて、この連載では、外来語についてのおもしろい話題も混ぜながら、言い換えの問題について、紹介したいと考えております。

初期の外来語辞典のつと

どういった外来語辞典が出版されていますか

国立国語研究所への外来語の言換えについての取材では、まず外来語辞典や外来語の数など記者が日ごろ抱いている疑問が出るようです。私の書棚には、これまでに収集した外来語辞典が発行年順に並んでいます。そこから、初期の外来語辞典や各辞典の名称、各辞典の収載語数などから尋ねられます。今回はそれらの質問の二、三に答えるようにします。

外来語とカタカナ語はどう違うのですか

明治末期から現在までに二二〇冊余りの外来語辞典が刊行されています。その『〇〇辞典』の箇所には、年代順に舶来語、外来語、カタカナ語が入ります。ただ、舶来語は今回紹介する明治末期の一冊に用いられている名称で、その後は外来語、一九七〇年ごろから次第にカタカナ語に移行しはじめ、現在はカタカナ語が大勢を占めています。

「外来語」は、「和語・漢語・外来語」という語の種別にかかわる用語です。広い意味では漢語や梵語なども外来語になりますが、辞典類では欧米から入ってきた語に限っていま

す。他方、カタカナ語はカタカナ表記の語という表記の上で区別される用語です。なお、この冊数には新語辞典は数えていません。

最初に出た外来語辞典は何ですか

明治四五（一九一二年）年に『日用舶来語便覧』（棚橋一郎・鈴木誠一共著 光玉館）というおしゃれた小型の辞典が刊行されています。そこには約一五〇〇語の舶来語が見出しに取り上げられています。この、「舶来語」は「欧米語」の意味で、広義の「外来語」から漢語等を除いた意味といえます。なお、「便覧」は全体に占める「本書附録」の割合に関係しています。

本書の特色は、「参考」として掲げましたように外来語の簡潔な言換えにあります。例えば「コンポジション」に「作文」を当てるというように、原則として一語で言い換えています。そして、二行目に原語を掲げて、他の言換え語を添えたり、説明を行ったりしています。このように欧米から入ってきた語を日語面で厳選し、言換えを一語で提示している外来語辞典は他にありません。

明治中期までに出ていないのですか

明治中期までの古い外来語辞典はないのかと不審に思われるかも知れませんが、古くは英和辞典類がその役目を担っていました。なお、明治五（一八七三）年に刊行された『洋語音譯箋』（村田文夫編）は、いろは順に「地名、人名、雑称」が掲げられています。その「雑称」に一般用語が少し取り上げられています。例えば「インデペンデント」を「恩的本教」に音訳して「獨立不覇ノ義」という説明を付けています。しかし、こういう語例はきわめて限られています。やはり、外来語辞典の出版は明治末期まで待つしかなかったようです。

〈参考〉

- コンペートー……金米糖
- Confeitos (蘭) 一種の菓子にして徳川氏時代の古くより盛に行はれしもの。
- コンポジション……作文
- Composition (英) 組成、述作、作物 (文學音學又は美術上の)、和解、和解の條件。
- コンマ……句點
- Comma (英) 句點即ち、形の記號にして、算術中小數點に此記號を用ふ。故に俗に普通以下の人を指してコンマ以下の人といふことあり。符號、とは異なれり。

特色をもった外来語辞典にどういったものがありますか

甲斐睦朗

独立行政法人国立国語研究所所長

第3回

外来語の現状と
その解決のために

何冊の外来語辞典が刊行されていますか

最初の外来語辞典『日用舶来語便覧』が刊行された明治四五(一九一二)年から平成一四(二〇〇二)年までの九〇年間に刊行された外来語辞典の数は、その辞典の規定を厳しく行いますと二二〇冊ほどになります。幾らか緩やかに広げたとしても二五〇冊を超えることはありません。あいまいな言い方しかできないのは、次の四つの問題があるからです。①増補版や改訂版などは別の一冊とは数えないのですが、増補または改訂に際して書名を改めている文献はどう扱えばよいのでしょうか。実は内容が同じで判型と書名を変えた二種の辞典を出している出版社が複数あります。②外来語辞典と、研究書あるいは読み物との区別が困難な文献があります。③外来語だけでなく新語も取り入れた新語辞典類は含めていません。また、俗語や隠語まで含めた辞典類も含めていません。この③の条件は厳しいようにも思います。④例えば建築関係というように、領域を絞った外来語辞典は含めていません。難解な専門用語が多いからです。

この二二〇冊ほどという冊数は、右の四項目を考慮に入れて計上した文献数なのです。

どの時期に最も多く刊行されていますか

最初の外来語辞典の刊行年から現在までの九〇年間に三期に分けてみましょう。すると、昭和二〇年までに二八冊が、そして、その後の三〇年間に二五冊が刊行されています。ところが、昭和五一年以降に一七〇冊も刊行されています。そこで一〇年刻みで整理しますと、昭和五一年からは四〇冊、昭和六一年からは九〇冊、平成四年からは四〇冊という冊数になります。つまり、昭和六一年からの一〇年間の刊行冊数の多さが際立ち、その後はまた減少しています。その増加の理由・理由としては、新しい外来語の大幅な増加、また、販売実績などが挙げられます。では、なぜ減少してきたのでしょうか。これは、推測ですが、編集の業務が外来語の増加についていけなくなったこと、領域を絞った用語辞典類が編集されていること、図書全体の販売がふるわないことなどが挙げられましょう。

重要語を示すような辞典がありますか

これまで刊行されている外来語辞典の中で、見出し語に重要かどうかの印をつけている文献が二冊あります。どちらも半世紀近く前の

辞典です。

①『外来語集』(日本放送協会編 日本放送出版協会 一九五三年)

本書には「おもに最近使用される外来語」約三〇〇語を収め、「放送用語として適当と考えられるもの」に○、「専門用語として使う場合の外は避けたいもの」に△、「放送用語としてはなるべく避けたいもの」に×の印を、各見出しの頭に付けています。

②『外来語小辞典』(魚返善雄編 研究社 一九五八年)

合計一〇二九〇語の見出しに、「最低限度これくらいは知っておかねば日常生活にもさしつかえらると思われる語」一二四四語、「知的教養として記憶または理解することの望ましい語」約三一五九語のそれぞれに印をつけて区別しています。これら約一〇〇〇語には、外国の国名、地名、人名なども入れています。

この二種の文献は、急増する外来語への対処の仕方を示唆するものということができません。これからは、こうした見識を示した外来語辞典が求められています。そして、国立国語研究所の外来語の言換えは、こうした路線に立った提案だと言うことができます。

和製英語はどのように問題なのですか

甲斐睦朗

独立行政法人国立国語研究所所長

第4回

外来語の現状と
その解決のために

和製英語にはどのようなものがありますか

第一回外来語言い換え提案で取り上げた六二語の中に和製英語が含まれています。「アイドリング・ストップ、スケールメリット、デイサービス、ノンステップバス」の四語です。和製英語は、この七〇年間に、日本式英語、日本英語、カタカナ英語などという名称で呼ばれてきました。ここでは、広く通用している「和製英語」という名称を使います。

和製英語としては、まず、二語以上の外来語による複合語が問題になります。右の和製英語は、いずれも二〜三語の外来語による複合語です。そして、その多くは、各構成語がすでに日常生活に定着している語になっています。右の四語のそれぞれの構成語の中で、日常語から遠いものがあるでしょうか。「アイドリング」は少し耳遠いかもしれませんが。しかし、「ストップ」以下の構成語はいずれも比較的なじみのある言葉が使われています。

どういう用例までを和製英語と言つのでしょうか

和製英語という用語を「日本で造語した外来語」の意味で使いますと、右の四つの外来語は複数の外来語を組み合わせた語ですから、その

典型とすることが出来ます。もちろん、「低床バス」のように漢語と外来語による混種語も日本で造語したのですが、これは、先に挙げた名称の中の「和製語」が適切になります。

それでは、「リストラクション」の後半部分を切り捨てた「リストラ」はどうでしょうか。第一回ではそうした英語圏で通用しない省略語は取り上げていませんが、和製英語を正面から問題にしますと、そうした省略語も問題になってきます。さらに、意味が原語からずれていて英語圏では通用しにくい「メリット」なども和製英語として問題になってきます。

和製英語はいつごろから注目されてきたのですか

昭和五(一九三〇)年ごろは、モボ・モガ的な西欧文化が街にあふれていました。機が熟したのでしょうか、その年に外来語辞典が五冊も刊行されています。緒言が「今や外来語の氾濫時代が来た」という文で説き起こされる辞典もあります。それぞれの凡例に、「日本式英語」「日本に於ける造語」などの略語が掲げられています。「**俗**とあるは之等の外来語を形どつて日本にて新造したものとの謂である」という説明を加えた辞典もあります。この中の一冊は大幅な増補改訂版ですが、巻末に「現

代語の引き方について」という一文を載せて、例として「**ガール**」の複合語を五九語も挙げています。これらのことから、少なくとも七〇年前には和製英語が注目されていたことがわかります。

和製英語はどのようにして問題になるのですか

これからも、新しい和製英語が生み出されていくでしょう。しかし、それらには、次の問題点があります。例えば「**デイサービス**」の場合、「**デイ**」も「**サービス**」も分かりやすい言葉ですが、その二語の知識からでは理解できない「**一日介護**」の意味が付与されています。それは、福祉分野の専門用語だからです。そして、この「**サービス**」という言葉が、これは有料なのか無料なのか、それとも、どういう意味なのかをあいまいにしているのです。

和製英語を日本人の英語習得の障害になる立場から取り上げた研究書が十数冊出版されています。また、逆の日本語教育の立場からの問題点の指摘も少なくありません。

結局、和製英語は、意味が明確でない、誤解を招きやすい、英語学習だけでなく日本語学習の面でも障害になるなどの点で歓迎しにくい言葉だと言わなければなりません。

新語による言い換えはむずかしいのですが

平成の福沢諭吉になるように

幕末から明治期にかけて外国の膨大な文化が日本に入ってきました。その分かりやすい表現のために、日本でも数多くの造語が行われました。よく知られている訳語には、西周の「哲学」、前島密の「郵便」などがあります。

昨年の夏、国立国語研究所に外来語の言い換えに取り組む委員会を設けた時、「平成の福沢諭吉になれ」という励ましをいただきました。それは、スピーチを「演説」に言い換えたような新造語が望ましいという意味でした。

意味が少しずれた既成語を使う

実は、福沢諭吉の「演説」にしても前島密の「郵便」にしても、江戸時代から使われていた言葉を外国語の訳語に適用したわけですから、意味が少しずれています。最初は違和感があったでしょうが、歳月とともに次第に定着してきたわけです。

幕末から明治期にかけての訳語で評判高いものに「経国（経世）済民」の略語「経済」があります。この中国古典に典拠をもっている「経済」という言葉をeconomyの訳語に当ては

めたのでした。訳語としては、「理財」なども有力でしたので、「経済」が訳語として定着したのは明治も後期になってからでした。訳語が定着するのに何年もの歳月がかかることがあります。

言い換えには二種類の方法があります

外来語の言い換えとしては、①類義の言葉を当てはめる、②複数の言葉を組み合わせる新しい複合語を造る、③新しい言葉を造る、という三種の方法があります。第一回の言い換え提案から例を拾いますと、①としてはガイドラインに「指針」、コンセンサスに「合意」を、それぞれ当てはめています。意味の微妙な違いは今後の歳月による修正や補充に期待するわけです。

次に、②の例としてはオンデマンドに「注文対応」、スクリーニングに「ふるい分け」という複合語を造っています。「ふるい分け」は和語なのでまだ長さが気になりません。しかし、五文字の漢語ですと、どうでしょうか。第一回では、シンクタンクを「政策研究機関」に言い換えました。これが限界かという印象があります。

新造語への期待と拒絶意識

ところで、③のまったく新しい造語ですが、熱望に反して、分かりにくいという批判をいただきそうです。外来語委員会は、第二回の中間発表でノーマライゼーションを「等生化」と言い換えております。「みんなが」等しく生きる（ようにする）」という意味です。その「等生」という言葉は造語ですから、当然、なじみがありませんし、どういう辞典にも載っておりません。そこで、よく分からないといわれたいしています。

「インフォームドコンセント」の言い換え

外来語委員会は、第一回の最終発表でインフォームドコンセントについて「納得診療」「説明と同意」の二語を提案しました。すでに「説明と同意」が『学術用語集薬学編』（文部省）に掲げられていることもあって、異例の二語の提案になったのでした。「納得診療」は先②の複合語の一例ですが、「説明と同意」は三種のどの分類にも入りません。それは、言い換え語でなくて説明的な表現になっているからです。

どじょう外来語を言い換えるのどすが

第二回の言い換えに取り組み中です

国立国語研究所の「外来語」委員会が、外来語の言い換えに取り組み始めて早くも一年余りが経過しています。本誌が刊行されるころには、第二回最終発表を控えているところで、第二回中間発表を八月上旬に行いました。第一回の最終発表と同じく全国から寄せていただいたご意見を参考にし、いくつかの調査を行ったうえで最終発表をまとめることになっています。

まだ誤解が少なくありません

本誌三月号に掲載した「外来語」言い換え提案（中間発表）について（相澤正夫執筆）は、国立国語研究所「外来語」委員会の取組について言葉を尽くしてわかりやすく説明しています。ところが、全国から寄せられるさまざまなご意見の中には、語の選定などに関する誤解が少なくありません。私どもの説明が十分でないからかとも反省していますが、誤解の背後には、それぞれの方の外来語についての強い思い入れもあるようです。

その誤解あるいは思い入れを三つだけ紹介

してみましよう。①日本語の盛衰に関しては自然に任せるべきで国が関与すべきでない、②すべての外来語をなぜ言い換えようとするのか、③少ない語の言い換えでは意味がない、というご意見です。今回は、それらについての説明を行うものです。

各省庁の白書から選びました

現在、広告や宣伝の文章には数多くの外来語が使われています。会社名などもカタカナ表記やローマ字表記の名称が少なくありません。委員会は、しかし、それらに使われている語でなくて、国民に向けて発表している官公庁の白書類に使われている外来語を問題にしています。公共性が高いという意味で、市町村の広報紙および新聞や放送で使われる外来語も問題にしていきたいですが、言い換える対象語は、まずは国民一人一人に向けて報告された白書類から選定する方針を立てております。

国語審議会答申を基本としています

言い換えの考え方については、第二二期国語審議会答申「国際社会に対応する日本語の在り方」に基づいております。国語審議会は、

日本の国際化をはじめとする新しい状況に対処するために、多用される外来語を取り上げ、次の三種に分けることを提案しました。①国民の間に定着しているとみなせる語は、そのまま使用する。②一般への定着が十分でなく、日本語に言い換えたほうがわかりやすくなる語は言い換える。③一般への定着が十分でなく、わかりやすい言い換え語がない語は、必要に応じて、注釈を付すなど、わかりやすくなるよう工夫する。

外来語委員会は、この三分類を参考にし、白書類のカタカナ表記の語をすべて抜き出し、国民への質問調査にかける語を選定しました。

考え方を表す語を選びました

第二回は五二語の言い換えを試みました。その少なさが指摘されることがあります。しかし、対象語に関する情報を可能なかぎり収集して、多面的に検討するためには、数に限りが出てきます。そこで、これからの社会等の改善のうえでなんらかの意義をもつ用語を選んだ、そのわかりやすい言い換えに力を入れるようにしたいと考えております。

言い換えから除外するのはよいところの言葉ですが

国語審議会は外来語を二種に分けました

第二期国語審議会第三部会「国際化に対応する日本語の在り方」は、増加する外来語・外国語の問題を取り上げて、I広く一般的に使われ、国民の間に定着しているとみなせる語、II一般への定着が十分でなく、日本語に言い換えたほうがわかりやすくなる語、III一般への定着が十分でなく、わかりやすい言い換え語がない語の三種に分けました。本稿は、その第I種と第III種に、どういう配慮を払うべきかについて検討してみました。

第I種はどういう語ですか

まず、『小学新国語辞典』（光村教育図書）の見出しは三万三〇〇〇語で、外来語は混雑語を含めて二七〇〇語を取り上げています。この全見出しは小学校段階で習得すべき語という選定になっています。すべて中学校段階では使用語彙に移行するものです。

次に、高校生以上を対象とした『新選国語辞典 第八版』（小学館）は、表紙裏に一般語の語種別分類を掲げています。一般語は約七万三〇〇〇語、外来語は約六四〇〇語で、割

合は八・八%です。この外来語には、わかりにくい語も含まれています。

国民に十分に定着している一般語が何語あるか、そこから、十分に定着している外来語が何語あるかについては調査ができておりません。仮に十分に定着できていない一般語が四万語前後であるとすると、外来語の数は、三〇〇語前後であるといえましょう。

第III種にはどういった語がありますか

まず、外来語の検討から外すべきものに外国の固有名詞（国名、地名、人名、企業名など）があります。国内でも新しい外国語の名称をもつ「りそな銀行」は、企業名ということとで言い換えの対象外になります。

国語審議会が第III種で問題にしているのは、十分に定着できていない外来語・外国語の中で、言い換えが困難な語でした。その言い換えの困難さとして次の二項目が挙げられます。

①一般への定着は十分でないが、専門分野では外来語のあたりで定着している語

高等学校学習指導要領には「情報」をはじめとしてコンピュータ用語が多く使われています。それは、「データベース、ソフトウェア、

ハードウェア」などです。

②一般への定着が十分でなく、これからも定着の可能性が少ないと予想される語

『国語に関する世論調査』で全世代の理解度が二五%以下の語がそれです。各省庁の白書類には、外国語をただカタカナ表記した語が少なくありません。

国立国語研究所は各省庁の白書類を調査して五〇〇〇に余る外来語・外国語を得ました。その中から、固有名詞以外に前記二項目に該当する語を外すことによって、言い換えるべき候補語を選定しているわけです。

第III種の選定に積極的に取り組みます

国語審議会の答申では、第III種の語例として「アイデンティティー、アプリケーション、デリバティブ、ノーマライゼーション、ハードウェア、バリアフリー」の六語を挙げています。国立国語研究所の「外来語」委員会は、これらの言い換えにも積極的に取り組もうとしています。それは、「アイデンティティー」や「ノーマライゼーション」などのように、これからの日本社会に大切な考え方を示す言葉が含まれているからです。

定着している外来語はどのように使ってもよいのですが

一般的に使われている外来語

前号では、第二二期国語審議会が「国際化に対応する日本語の在り方」の中で、外来語を三種類に分けたことについて述べました。今回は、「広く一般的に使われ、国民の間に定着しているとみなせる語」にかかわる問題を取り上げます。

前号では、これらの外来語が、国語辞典で数えると、三五〇〇語近くになることを述べました。中でも、小学生用の複数の国語辞典に共通して取り上げられている二〇〇〇語近くは十分に定着できている外来語ということになります。例えば一冊の小学生用の国語辞典の「ナ」で始まる見出しを、固有名詞は除いて、順に挙げてみますと、「ナイフ、ナイロン、ナップザック、ナトリウム、ナレーション、ナレーター、ナンセンス、ナンバー、ナンバープレート」の九語です。この多くは名詞で、だれもが理解できる言葉ばかりですから、言い換えの必要がありません。そのまま使っても何の支障もないわけです。

それでは、これらの外来語は、どのように使ってもよいのでしょうか。

第I種に見られる二つの問題

第I種の外来語は、先に述べたように、だれもが知っている言葉ということ、一語一語の使用には特記すべき問題がありません。しかし、第I種の外来語に共通する問題点として、次の二項目を挙げる必要があります。

- ①ほかに言葉があるのに、外来語を好んで使うこと
- ②外来語を多用すること

外来語を好んで使う問題

街を歩くと「本屋」「書店」「ブックショップ」などという看板を見ることがあります。いずれも雑誌や図書を販売する店を表しています。語種（和語、漢語、外来語）が異なるために、その表す感じが少しずつ違ってきます。特に、カタカナ表記の語は新鮮な感じがあるために、多用の引き金になっているようです。このような例は「拳銃／ピストル」「開店／オープン」をはじめとして枚挙にいとまがありません。

市町村から月々刊行されている広報紙は、最近では外来語の使用に自覚的になり、読み手のわかりやすさへの配慮がかなり働くようになってきています。しかし、催し物の案内の欄では、相変わらず外来語が多用されています。例えば特別企画の催しについて「――祭」でなく「――フェスティバル」が使われています。近年はまた「――フェスタ」に移ってきています。これらは同じ意味の言葉です。書き手は、読み手の興味や関心を引くためにカタカナ表記の語を使おうとしているのです。

外来語を多用する問題

なんらかの文章を読んでいて、その表現のまずさに抵抗を覚えることがあります。その一つに外来語を多用した文章があります。例えばある広報紙では「シティアートの森」という催しについて「各作品から発せられるパワーがアイガーデンエアの緑と融合することで、『街の中で森を感じる空間』を創出しました」と解説しています。この意味がわかるでしょうか。同じ意味の言葉があるのに、いくつもの言葉をわざわざ外来語で言い表すような文章にはへきえきしてしまいます。

これは、まさに落ち着いた情緒や的確な論理を表す日本語のよさを否定する、あるいは破壊する浮いた表現ということになります。

カタカナ語と外来語はどう違うのですか

カタカナで表記する語

最近では、外来語辞典でなくてカタカナ語辞典が出版されています。このように名称の変更が行われたところに近年の外来語増加の根本問題があります。カタカナ語ですが、すべてのカタカナ表記語から、擬声語、動植物名、外国の固有名詞などを除きます。そうして得た欧米出自のカタカナ語と外来語に大きな違いがあることが問題になります。

カタカナ語と外来語はどう違うのですか

外来語は、原則として日本語として定着している欧米出自の言葉を指しています。その「原則」の判断ですが、第一に国民の多くによく理解されている、第二に後で学習指導要領に関連して述べますが、特定の分野ではよく理解されている、第三に定着の度合いはさまざまだということがあります。

さて、カタカナ語という用語を使った場合、定着の度合いという物差しをすっかり外してしまうことになります。日本ではほとんど知られていない難解な外国語であっても、カタカナで表記することが可能で、現実に、そういう安

易な表記の外国語が数多く紛れ込んでいるのです。そうした外国語の多くは英語です。それでは、一定の水準の英語力があればそれらを理解できるのでしょうか。

普通の英語力では理解できません

高校卒業程度の英語力であれば、一般の英語表現は理解できます。ところが、新しく入ってくるカタカナ語の多くが特定の領域で使われる専門語であり、一見易しい言葉のようでも、特別な意味・用法で使われているために、わかりにくくなります。

この、普通の英語力では理解しにくい問題は、日本人の英語力への敗北感を付与しがちです。このことが、逆に国語力からの逃避に向かわないようにしなければなりません。

学習指導要領で使われている専門語

高等学校の学習指導要領には、三五〇語ほどの外来語が使われています。国語科はスピーチの一語だけですが、工業科や商業科などは専門語としての外来語が数多く駆使されているのです。しかし、ここでは、外来語だけでなく、和語、漢語による専門語も多く使用さ

れています。例えば普通科高校に進んだ生徒がそれらを理解しようとするなら、その教科の履修が必要になります。すなわち、学習指導要領で使われている外来語の多くは、特定の領域の専門語であって、一般社会の言語生活の言葉とは一線を画しているのです。そこで、これらを、注釈も付けないで、広報紙などに使用したとすると、大きな問題になってきます。

定着度の調査に別の物差しが必要です

外来語は日本語として定着している言葉です。その定着度は、「国語に関する世論調査」などで調査しました。ただし、国民の多くには普及できていないが、高校の工業科では基礎的な用語になっている、また、あと何年か経つと、国民全体に普及するだろうという見方などを別に立てることが考えられます。

国立国語研究所は、国民の多くが現在理解できているという尺度で定着度を測ってきましたが、もう一つの将来的な物差しなども粗略にできません。例えば、データベースをはじめとする情報に係る外来語はそういう物差しでどう扱うべきかが決まりそうです。

外来語言い換えの普及の問題

甲斐睦朗

独立行政法人国立国語研究所所長

第10回

外来語の現状と
その解決のために

国民は外来語の言い換えをどう見ているか

昨年一月の記者発表の席で、「国立国語研究所の外来語言い換えの取組は、どういう効果をもたらしているか」という実効に関する質問をいただき、次の三つについて回答しました。一つは、新聞やテレビなどの報道機関が外来語言い換え案を報道してくださった結果、外来語言い換えの試みが広く知られてきていること、もう一つは、行政白書や広報紙などが程度に差がありますが改善されつつあることです。積極的にわかりにくい外来語の対策に取り組み始めた自治体も少なくありません。今回は、最初の事項について、新聞の投書を中心に説明してみます。

「USO放送」の話題

第一回外来語言い換えの中間発表は平成四年一二月下旬に行われ、翌年一月一日の読売新聞中部支社版朝刊三八ページには、「十二月のUSO放送」の月間賞受賞作として、「**【題】カタカナ語の言い換え例示** **【本文】** コンセンサスを得られるかな——国立国語研（春日井・ボギー）」が紹介されています。

外来語（以下「カタカナ語」を含む）を話題にした「USO放送」の作品は、前記の月間賞を最初として二〇例ありました。いずれも平成一五年の一年間に掲載されたもので、国立国語研究所の外来語の言い換え提案を機会として、新しいカタカナ語の肩身が狭くなったことを嘆いてみせたり、逆に、新しい言い換え語が難しくてわかりにくいと苦情を述べたりする内容です。

「かたえくぼ」の話題

朝日新聞では、やはり中間発表を行った直後の平成一四年一二月二八日の西部支社版朝刊一二面の「かたえくぼ」に「**【題】** 外来語言い換え例 **【本文】** ケータイ、これは日本語だった——国立国語研究所（福岡・きんごろう）」が掲載されています。「かたえくぼ」は、この二〇年間に八〇〇〇例近くの作品が掲載されていますが、外来語あるいは国立国語研究所を話題にした作品は、この作品をはじめとした四例だけです。

読売新聞の「よみうり時事川柳」

「よみうり時事川柳」に掲載された川柳は、

この六年間で四〇〇〇例を数えますが、外来語を話題とした川柳はわずか二九例で、その中の一四例までが平成一五年の一年間に掲載されたものです。なお、残りの一五例は第二期国語審議会が外来語を問題にし始めて以来の用例です。

日本人の多くは、これまでは、わかりにくい外来語を聞くと、黙って下を向いてしまいがちだったのですが、最近はその説明を求めようと積極的に発言する姿勢が生まれてきているようです。

朝日新聞の投書欄「声」

朝日の「声」欄で外来語を話題にした投書は、この二〇年間に一二五例を数えます。その半数近くが国語審議会が外来語についての答申を行った平成一二年以降の投書で、また、その二七例が平成一五年一年間に掲載されています。多くの方が外来語に関心を抱いていることがわかります。その投書を読むと、外来語の安易な使用を問題にし、意味のわからない外来語があふれている状況を嘆じ、日本語化を大切にすべきだという指摘を行っています。

外来語言い換え提案は継続すべきか

外来語言い換え提案は 効果を上げていますか

本稿は、この連載の最終回として、「外来語」委員会の言い換え提案の効果について指摘すると同時に、昨年四月からの内容のまとめを述べることにします。

昨年一月の第二回外来語言い換え提案の記者発表の席で、「国立国語研究所の外来語言い換への取組は、どういう効果を上げていますか」という実効に関する質問をいただきました。その質問は、第一に白書などの外来語状況の改善、第二に言い換え語の普及という二つの問題を合わせてもっています。

そこで、まず、どうなることが理想なのかについて説明してみましよう。対象を白書類に限ってみますと、外来語の言い換え提案が、各省庁の白書類に反映されて、①言い換え提案が活用されている、②わかりにくい外来語がすっかり紙面から消えている、③やむをえず使っている専門語等についてはわかりやすい注釈が付いている、④「アプローチ」や「プールする」「チェックする」のような安易な表現が原稿段階で推敲されて紙面から消えている、

という四つの事項が私どもの願いです。また、その波及効果として、わかりにくい漢語表現や専門用語の使用にも配慮が見られるということが挙げられます。そこで、先に挙げた質問が大切になってきます。

外来語は数直線に 位置づけることができます

白書類に数多く使われている外来語は、①日本人の多くに十分に理解されている語を右極、②ほとんど知られていない語を左極とする数直線できらえることができます。左極の語群は現在もなお増え続けています。

右極には、「ガス」「コンロ」のように、生活の中に定着している名詞中心の語があります。これは問題外と言えましよう。ところが、その次に、多くの人が知っている「スタート」や「チェック」などが続きます。これらは、例えば「スタート／始める・出発・開始」のように別の日本語をもっているのに、一種の流行として安易に使われています。英語の普及によつて、この傾向はいつそう強まりそうです。その乱用は軽薄な印象を与えます。

「外来語」委員会の目的は何ですか

国立国語研究所「外来語」委員会は、「スタート」や「チェック」のように日本語を別な備えた語群に隣接する外来語を取り上げています。数直線で言いますと、中心よりはずっと右よりで、十分には定着できていないけれども、これからの社会をつくる上で大切だと思われる言葉を厳選して、それらの言い換え提案に取り組んでいるのです。第二回の提案まで、およそ一〇〇語の言い換えを提案してきました。

「外来語」委員会は、直接には、必要な外来語を選んで言い換え提案に取り組んでいます。が、先に述べましたように、数多くのわかりにくい片仮名表記の外国語の使用をなくす、あるいは少なくすることが目的です。言い換える、送り手側の自覚を促すことにあります。

最後に、『文部科学白書』は、完全な見直しが行われていることを指摘しておきたいと思えます。また、『外交青書』は索引を設けたり、脚注をつけたりははじめました。以前と比べますと、読みやすくなっています。これを、その第一歩としたいと思います。